

自己知覚に動機づけられた日本語と英語中間構文の言語的現象 —探索行為とアフォーダンスを中心に—

千晃載

(韓国啓明大学)

【要旨】本稿は生態心理学理論で重視する自己知覚(探索行為・アフォーダンス)の概念が英語中間構文(有生・無生主語中間構文)に適用でき、それによって中間構文と形態、統語、意味的に類似した関連構文(非能格自動詞構文と非対格自動詞構文)との違いを説明できるということを述べたものである。本稿の分析から英語中間構文は日本語中間構文と同様に基本構文であり、生態心理学理論が構文現象を解明する上で、とても有効な分析手段となり得ることが明らかになった。さらに本稿の分析から人間の知覚行為において自己知覚の低位概念であるの冗長性と等価性が必ずしも当てはまるとは限らないことから生態心理学理論の修正が行われるべきであることも明らかになった。

キーワード：生態心理学、自己知覚、中間構文、探索行為、アフォーダンス

1. はじめに

次の(1)と(2)に見られるように、日本語と英語にはそれぞれ有生名詞や無生名詞を主語にとる有生主語中間構文と無生主語中間構文というものがある¹。以下の節では有生主語中間構文と無生主語中間構文を区別しない場合は中間構文と略称する。

- (1) a. 花子はちょっとしたストレスですぐ泣く。(有生主語中間構文)
 b. この陶器は容易く割れる。(無生主語中間構文)
- (2) a. Mary flusters easily². (有生主語中間構文)
 b. This truck drives easily. (無生主語中間構文)³

¹ 以下であげる日本語例はすべて作例である。作例の妥当性はすべて矢原正博教授(韓国慶北大学日語日文学科客員教授)からご検討いただいた。しかし、研究の責任はすべて本研究者に帰する。

² 英語例の引用先は別途表示した。別途表示のない例は作例である。

³ 以下の日本語や英語の例からは「有生主語中間構文」「無生主語中間構文」を別途表示しない。

日本語と英語中間構文は主語の属性を記述しその属性が不特定多数行為者の行為を受け発揮されることを記述するにもかかわらず、受動構文にならないところに最大の特徴がある。むしろ日本語の場合は自動詞形(可能動詞形)を、英語は他動詞形(自動詞形)と同一の形態をとる。しかしだからと言って、日本語や英語中間構文の動詞述語が自動詞(可能動詞)や他動詞形(自動詞形)そのものであるという意味ではない。なぜなら広く知られているように、日本語や英語中間構文は自動詞(可能動詞)や他動詞形(自動詞形)を取る構文からは見られない統語意味の特徴を有するからである。そこで日本語や英語中間構文はそれぞれ自動詞構文・可能構文、他動詞構文・自動詞構文の動詞形態とは異なる同音異形の独立構文とみなす。

本稿ではこの方針にしたがい統語意味の基準ではない生態心理学的観点に基づき、日本語や英語中間構文が関連構文と区別される基本構文であることを主張したい。具体的に言えば、千(2020、2021)の研究を土台に「探索行為」と「アフォーダンス」に動機づけられた英語中間構文を自動詞構文(非能格自動詞構文、能格構文)と比較する形で徹底的に分析したい。このことから「探索行為」と「アフォーダンス」という生態心理学的概念は、日本語のみならず英語中間構文の分析にもかなり有効であり、同時に普遍性の高い理論であることを明らかにする。

2. 日本語と英語中間構文の文法的諸特徴

この節では先行研究により明らかになった日本語と英語中間構文の文法的特徴を紹介したい。

2.1. 日本語中間構文

下記の(3)と(4)は日本語中間構文(有生主語中間構文と無生主語中間構文)を例示したものである。

- (3) a. 太郎の母は些細なことですぐ怒る。
 b. 太郎は人におだてられるとすぐいい気になる。
- (4) a. この消しゴムのカスはよくまとまる。
 b. この本の表紙はすぐ破れる。

千(2021)により明らかになった日本語中間構文は(個別主語(指示語+名詞)

+主語格助詞「ハ」+副詞+(漢語)動詞)の配列を有する。日本語中間構文は、以下のような統語・意味的特徴を有する。まず第1に、中間構文の動詞(中間動詞)は特定の形態を取らない。つまりさまざまな形態を有する。第2に、主語は対応する他動詞構文の目的語である。第3に、行為者(agent)は統語上生じえないが意味上その存在は含意される。ここでいう行為者は不特定多数行為者「われわれ」「誰でも」「誰もが」である。第4に、すべての動詞が中間動詞にはなりえない。つまり中間動詞への派生を許す動詞と許さない動詞がある。第5に、中間構文には様態副詞「すぐ」や難易副詞「容易く」、副詞句(例えば、(1a)の「ちょっとしたストレスで」)などが義務的に伴う。第6に、中間動詞は状態動詞である。そこで中間動詞は命令形、進行形、行為者志向の副詞「慎重に」などの要素と共起しないか、しにくい。第7に、中間構文(3)や(4)に見られるように主語の性質や属性を記述する。

2.2. 英語中間構文

次の例文は典型的に英語中間構文を例示するものである。(5)は有生主語中間構文を、(6)は無生主語中間構文を例示する。

- (5) a. Mary discourages easily.
 b. John amuses easily.
- (6) a. That box lifts easily. cf. 本多 (2013: 96)
 b. Your case carries easily. cf. 本多 (2013: 96)
 c. The new design of ball catches well. cf. 本多 (2013: 96)
 d. This wine drinks like it was water. cf. 吉村 (1995: 257)

辻(2002: 155)によれば、英語中間構文の統語・意味的特徴としてまず「名詞句+動詞+付加詞(副詞や副詞句に相当する)」の統語形式を有し、第2に、行為者を文表面に表示させえない。第3に、ほとんどの場合、副詞や副詞句に相当する付加詞「easily」や「well」などを必須的に伴い、第4に、中間動詞は現在単純時制で表される。第5に、中間動詞になりうる動詞となりえない動詞があり、第6に、助動詞「will」や「won't」を伴うが、「can」や「can't」は伴わない。第7に、中間構文の主語は有生名詞より無生名詞(人工物)のほうが多く、第8に、中間構文は「宣伝・広告」を表す文として集中的に用いられる。最後に、容認度において激しい揺れが観察されることが挙げられる。

3. 自己知覚の理論的背景と先行研究

この節では自己知覚の理論的背景と自己知覚の概念を援用し中間構文を分析した先行研究を見てみたい。

3.1. 自己知覚

この節では分析に入る前に、本稿で行う中間構文分析の理解を得るために生態心理学理論の根幹をなす自己知覚(探索行為・アフォーダンス)の概念を紹介したい。以下で示す自己知覚の概念と説明はすべて本多(2013: 47-64)による。

まず探索行為(人間や動物が対象(生物・無生物・状況)を知ろうとする一連の行為)の能動性であるが、これは知覚者が人に統制されることなしに、自ら進んで積極的に探索行為をするということである。第2に、知覚システムである。これは探索行為に関与する五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)のことを言う。第3に、生物体の運動と意思の知覚である。これは例えば、ある人のダンスから楽しいダンスかそれとも悲しいダンスかという意味を知覚できるということである。第4に、アフォーダンスである。これは知覚されたある対象が知覚者に与える行為の可能性を言う。例えば、椅子は知覚者に対して「座る」ことをアフォードする。第5に、情報の冗長性と知覚学習である。これはある対象が複数の知覚システムにより知覚されるということである。さらに知覚学習は対象に対する知覚が可能であるためには、一定期間の学習が必要であるということである。第6に、文化学習と知覚行為の循環である。例えば「椅子」からアフォードされる「座る」という行為は、人間社会の中で行われる文化的行為であるということが、知覚者にあらかじめ与えられなければならないし、それにより知覚者は「椅子」がアフォードすることを実際経験しながらそれを知覚する。すなわちある対象が与えるアフォーダンスと知覚行為が、一方ではなく双方に循環するということである。第7に、アフォーダンスの評価である。対象が与えるアフォーダンスは、知覚者にとって必ずしも有利なものとは限らない。つまり、対象が与えるアフォーダンスには、有利(有益、無害)なもの、不利(無益、有害)なもの、中立的なものが混在しているということである。最後に、探索的行為と遂行的行為である。探索的行為は知覚者が対象をただ知ろうとする行為であり、対象にある種の変化をもたらすことはない。これに対し遂行的行為は、対象が与えるアフォーダンスを知覚者が直接的に行動に移した行為のことを言う。

3.2. 自己知覚関連の先行研究

この節では自己知覚に関連し英語中間構文を考察した本多(2013)、日本語と英語中間構文を考察した千(2020)の研究を見てみたい。

まず本多(2013)から見てみよう。本多(2013)では、英語中間構文の述語動詞は知覚活動を、動詞句と副詞句は対象(主語名詞)が知覚者に与えるアフォーダンスを表すとした(p.67と(5)-(6)参照)。しかし、問題は探索行為とアフォーダンスにかかわる説明はあるものの、3.1節で示したそれ以外の自己知覚の概念にかかわる説明は全く見られないということである。千(2020)では英語中間構文、例えば(5)-(6)が知覚者の能動的知覚行為により得られること、知覚者のもつ意味役割として行為者(動作主)、目撃者、行為者+目撃者のように3通りあるとした。そして英語中間構文では(5)のみならず(6)のような無生主語中間構文でも主語の属性に対する知覚が冗長的に行われ、構文の成立有無にアフォーダンスが深くかかわっており、中間構文の記述する主語の属性は、有生主語と知覚者との関係のなかで学習されたことであるとした。また中間構文が記述する主語の属性は日本語中間構文と同様にエコロジカル・セルフ、観察点、知覚者、時間がそれぞれ拡大することに加え、人のロコミなどのような媒体を通して伝わり得るとした。最後に、以上挙げた特徴が当てはまるかどうかにより中間構文と関連構文(非能格構文、状態変化表現)が互いに区別されるとした。

ところが、問題は本多(2013)と千(2020)では触れていない自己知覚概念を英語中間構文に適用できないかということである。千(2021)では3.1節で紹介した自己知覚概念をもって日本語中間構文を分析はしているものの、それが果たして英語中間構文にも適用できるかどうかは未知数である。

4. 自己知覚と英語中間構文・関連構文

この節では千(2021)の分析を援用し日本語中間構文と同様に英語中間構文と関連構文(非能格自動詞構文・非対格自動詞構文)にも自己知覚の概念を適用できるのか否かを述べることにより、英語中間構文が関連構文と区別される独立構文であること、ひいては自己知覚の概念が構文分析に有効な分析手段となり得ることを明らかにする。

4.1. 知覚の能動性と中間構文・関連構文

千(2021)では、日本語の有生主語中間構文と無生主語中間構文とが、知覚の能動性にかかわる幾つかの点で共通点と相違点を持つとしたが、これを英語中

間構文に援用し分析してみたい。

- (7) Mary laughs a lot.
- (8) This oven cleans easily and effectively.
<https://www.englishforums.com/English/MiddleConstructions>
(閲覧日: 2021.06.19)
- (9) a. He danced with pain.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content> (閲覧日: 2021.06.19)
b. Dogs howl when they are lonely or want to see their owner.
<https://eikaiwa.dmm.com/uknow/questions/86717>
(閲覧日: 2021.06.19)
- (10) Tears flowed down her checks.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%%22>
(閲覧日: 2021.06.19)

まず主語の属性への知覚に所要する時間差である。(7)と(8)は知覚の能動性という概念を共有するという点で共通点が見られるが、(7)は知覚者が長時間にわたる人間関係を通し主語の属性を知覚したのに対し、(8)は相対的に短時間に主語の属性を知覚したと解釈されるのが一般的であるという点で違いがあると言える。これに対し、(9a)と(10)の文は瞬間的に主語の状態変化を知覚したと解釈される。(9b)は反例のように思われるが、出現する頻度数があまり高くないので、このような特徴は非能格自動詞構文の随意的特徴にすぎない。そこで以下では(9b)は論外とする。第2に、(7)と(8)は主語の属性が、多様な空間で知覚された可能性があるという点で共通点が認められる。例えば、(8)は一定の条件さえ与えられれば、場所を問わずどこにおいても主語の属性が知覚できることを表す。これに対し(9a)と(10)の文は特定の空間で主語の状態変化が知覚されたものと解釈される。第3に、(7)と(8)は行為者(不特定多数行為者)の意図性により違いが生ずる。例えば、(7)は行為者が笑わせるための意図をもつが、一定の原因が与えられさえすれば主語の属性「よく笑う」ことがいとも簡単に知覚できることを表す。これに対し、(8)は主語の属性を知覚するためには、必ずオープンを作動するための意図を持たなければならないことを表す。一方、(9a)と(10)の文には(7)や(8)の以上のような解釈はできない。第4に、(7)が記述する主語の属性は人間でも動物で

も無生物(おかしな絵、面白い動画など)でもかまわず発揮させうるが、(8)は必ず人間でなければならない。これに対し(9a)と(10)の文には(7)や(8)の以上のような解釈はできない。第5に、(7)が記述する主語の属性を呼び起こす人物は、行為者でも知覚者でもいいが、(8)の場合は必ず同一人物であると解釈される。これに対し(9a)と(10)の文には(7)や(8)の以上のような解釈はできない。最後に、(7)はさまざまな探索過程(行為、表情、面白い話、可笑しい仕草など)を通して知覚された可能性があるが、(8)は(7)ほどさまざまなチャンネルを通して知覚したものとは考えられない。これに対し(9a)と(10)の文には(7)や(8)の以上のような解釈はできない。

4.2. 知覚システムと中間構文・関連構文

この節では、千(2021)で分析した知覚システムと中間構文との相関関係を英語中間構文に援用し分析する。次の例を見よう。

- (11) Mary frightens easily.
cf. Nakamura (1997: 132) → 本多(2013)から再引用
- (12) The clothes iron well.
<https://www.englishforums.com/English/MiddleConstructions>
(閲覧日: 2021.06.19)
- (13) She danced with pain.
- (14) The plane had to glide until it could make an emergency landing.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%%22>
(閲覧日: 2021.06.19)

(11)の記述する主語の属性は視覚のみならず、聴覚システムでも知覚できる可能性がある。もし知覚者が視覚障害者であれば健常者以上に、さまざまな知覚システムで主語の属性を知覚できる可能性があるように思われる。(12)も冗長的に知覚システムを稼働し知覚したことを記述すると思われるが、(11)ほど知覚システムを冗長的に稼働させたとは解釈されない。むしろ視覚システムを優先的に稼働させ、主語の属性を知覚したものと解釈される。4.5節で詳述する。これに対し、千(2020)ですでに述べた通りに、関連構文(13)と(14)では主に視覚システムを優先させ主語の状態変化を知覚すると解釈される。このことは本研究者が所有している例からでも確認できるが、それはつまり中間構文の

ほうが非能格自動詞構文と非対格自動詞構文のほうより例の採集が容易ではないことと、非能格自動詞構文と非対格自動詞構文はほとんどの場合、主語の状態変化を知覚者の視覚システムで捉えたものと解釈されるケースが多いことから裏付けられる。

4.3. 生物体の運動と、意思の知覚と中間構文・関連構文

千(2021)で分析した「生物体の運動、意思の知覚」という概念を英語中間構文に援用し分析してみよう。次の例を見よう。

(15) Mary seduces easily.

(16) This bra unhooks at the front.

<https://www.grin.com/document/36907> (閲覧日:2021.06.19)

(17) He laughed a long, bitter laugh.

<https://ejje.weblio.jp/sentence/content> (閲覧日: 2021.06.19)

(18) His chance slipped through his fingers.

<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22%29%22> (閲覧日: 2021.06.19)

(15)が記述する主語の属性は、主語の取るある種の運動(動作)を通しほぼ間違いなく読み取れる。つまり主語の取るさまざまな反応(運動)を通し、主語の属性を正確に知覚できるのである。このことはすでに述べたように、中間構文の記述する主語の属性が長期間に渡りさまざまな空間、さまざまなチャンネル、知覚システムの冗長的稼働を通し知覚されることから裏付けられる。これに対し、(17)は(15)のような解釈が必ずしも許されるとは限らない。というのは中間構文にとって主語の属性は常に真でなければならないが、(17)の非能格自動詞構文において主語の状態変化は真でも偽でもかまわないからである。

一方、(16)と(18)は主語が無生名詞なので生物体の運動や意思の知覚という概念を適用することはできない。

4.4. アフォーダンス、エコロジカル・セルフと中間構文

千(2021)では、中間構文が与えるアフォーダンスはその種類が多く中間構文の記述する主語の属性は、すべて知覚者の視野内で知覚されたものであるとした。このことから日本語中間構文にはエコロジカル・セルフとアフォーダンスという概念が密接にかかわりあっているとした。それではこのことが英語中間

構文にも当てはまるか見てみよう。

- (19) Mary excites easily. cf. Nakamura (1997: 132) → 本多(2013)から再引用
 (20) The floor waxes easily. cf. 吉村(1995: 255)
 (21) The man in the train kept sneezing.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content> (閲覧日: 2021.06.19)
 (22) Her blouse slid from the chair [onto the floor].
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22%5Bonto+the+floor>
 (閲覧日: 2021.06.19)

まずエコロジカル・セルフから見ると、(19)と(20)の記述する主語の属性が知覚者の視野内で知覚されたものと考えることができる。もし(19)と(20)の文を他者から聞いたことであれば断定形ではなく伝聞形式(「according to～」)や推定を表す形式(「will, would, should, could, must」など)を挿入しなければならないからである。さらに、アフォーダンスであるが、日本語中間構文と同様に英語の中間構文から与えられるアフォーダンスもその種類が多いと言える。例えば、(19)を知覚した人は主語「メアリ」が興奮しないように、あるいは興奮するように仕向けたりすることができる。さらに興奮するように仕向ける方法や場所、時間帯もいろいろあり得る。(20)の場合も同様のことが言えるが、例えば(20)から知覚者は主語「フロア」や「ワックス」の個人的購入や注文、発注、生産などのような多様なアフォーダンスを取る可能性がある。一方、関連構文の(21)と(22)の主語の状態変化が知覚者の視野内で知覚されたものと解釈される点では、中間構文と共通点をもつと言えそうである。しかし、違いは文が与えるアフォーダンスの有無である。(21)や(22)から与えられるアフォーダンスは全くないか、あるといってもその数は至極に限られている。例えば(22)に気づいた知覚者が取る行為は落ちている彼女のブラウスをせいぜい拾うかそれとも無視するかいずれかの1つである。このことは千(2020)でも述べたように、関連構文が主語の一時的、突発的、予測不可能な状態変化のみを記述することと深い関係がある。

4.5. 情報の冗長性、知覚学習と中間構文・関連構文

すでに4.2節で英語中間構文の記述する主語の属性は、知覚者が複数の知覚システムを冗長的に稼働した結果、得た情報であり得るとした。これに加え、

その情報は知覚者によって一定期間学習された結果であると言える。というのは知覚システムを冗長的に稼働させ主語の属性を知覚するためには、必然的に時間を所要するからである。次の例(23)と(24)には、この説明をうまく適用できると思われる。このことは千(2020)でもすでに述べた通りである。

- (23) John terrifies easily.

<https://www.englishforums.com/English/MiddleConstructions>

(閲覧日: 2021.06.19)

- (24) The table polishes well with this cream. cf. 影山(2002: 190)

- (25) The dog jumped at the man ('s throat).

<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22%28%27s+throat%22>

(閲覧日: 2021.06.19)

- (26) The raft floated out to sea.

<https://ejje.weblio.jp/content/float> (閲覧日: 2021.06.19)

しかし本多(2013: 52)では、知覚者が所有する複数の知覚システムから得られる情報が冗長的であると同時に等価的であると主張する。例えば、(23)の記述する主語の属性は、複数の知覚システムを稼働することにより知覚されたと考えられるが、だからと言って知覚者がすべての五感システムで得た知覚情報とは言えないため、本多(2013)の主張は必ずしも正しいとは限らない。つまり、(23)の記述する主語の属性は「聴覚」「視覚」「触覚」システムでは知覚できるが、「嗅覚」や「味覚」システムでは知覚できないからである。さらに(24)の場合「視覚システム」のほうがほかの知覚システムより正確に主語の属性を捉えられると思われる。また(24)の例は知覚者が健常者である場合、視覚システムのみで主語の属性を知覚する可能性が高いことからこの考え方の正しさが裏付けられる。これに対し関連構文の(25)や(26)は主語の状態変化が知覚者の視覚システムのみで知覚され、さらに主語の状態変化に突発的で偶然に気づいた可能性が高いために、中間構文とは異なり非冗長的であり、主語の状態変化に気づくのに知覚学習が行われた可能性も顕著に低いと解釈される。このような違いは千(2020)でも述べているように、中間構文とは異なり非能格自動詞構文と状態変化表現(非対格自動詞構文に相当する)の記述する主語の情報が知覚者の短期記憶にとどまる可能性が多いことから裏付けられる。さらにこの違いは対象の知覚において五感システムが必ずしも冗長的に、等価的に作動

しないこと、ひいては生態心理学で重視する自己知覚概念を修正すべきであることを強力に示唆することでもある。

4.6. 文化学習、知覚・アフォーダンスの循環と中間構文・関連構文

3.1節と千(2021)で扱った「文化学習、知覚・アフォーダンスの循環」の概念をもって英語中間構文を見てみよう。

- (27) John terrifies easily.

<https://www.englishforums.com/English/MiddleConstructions>

(閲覧日:2021.06.18)

- (28) This oven cleans easily. cf. Nieda (2005: 130)

- (29) The baby cried for its mother's breast.

<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%27s+breast%22>

(閲覧日:2021.06.19)

- (30) This land sinks gradually to [toward] the lake.

<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22%5Btoward%5D%22>

(閲覧日:2021.06.20)

まず、(27)と(28)から与えられるアフォーダンスを知覚者は、文化的知識として備えておかなければならない。例えば、(27)の記述する主語の属性「ひどく怖がること」が、人間社会のなかで望ましくないものという知識を知覚者は知っておかなければならない。(28)に対しても同様のことが言える。これに対し関連構文(29)にはアフォーダンスが与えられにくいために、主語の状態変化は知覚者にとってはただの事実関係を記述しているに過ぎない((30)も含まれる。)。第2に、(27)や(28)を知覚した知覚者には主語の属性から与えられるアフォーダンスをどのように利用するのか、すなわちいい意味で利用するのか悪い意味で利用するのかという選択肢がおかれているが、少なくともどちらかのアフォーダンスを実行するに当たって、社会文化のなかであらかじめ学習されなければならないという前提が必要である。どちらかのアフォーダンスを実行することにより、社会文化的規制が作動したりしなかったりするわけである。これに対し、関連構文の(29)や(30)にはアフォーダンスが与えられにくいために主語の属性から与えられるアフォーダンスを善用するか悪用するかという解釈は不可能であるか、可能だとしてもそれは副次的なものに過ぎないと解釈さ

れる。最後に、知覚とアフォーダンスの実行は循環する。(28)で言えば、主語「oven」の属性に対する知覚は「clean」という行為を、「clean」という行為は主語に内在している属性への知覚を可能にする点で英語中間構文には「知覚と行為の循環」という概念が当てはまると考えることができる。これに対し関連構文の(29)や(30)にはアフォーダンスが与えられないかあるいは与えられにくいために、知覚とアフォーダンスが循環する可能性はほぼ皆無に近い。例えば、(30)に気づいた(知覚した)一般の知覚者にできることはほとんどなく、できることがないために再び主語の状態変化に気づく(知覚する)こともない。つまり主語への知覚とアフォーダンスとの循環可能性が最初から途切れているのである。

4.7. アフォーダンスの評価と中間構文・関連構文

千(2021)では、日本語中間構文から与えられるアフォーダンスは基本的に聞き手にとって有利(有益、無害)なものであるとした。このことを英語中間構文に当てはめて考えてみよう。

- (31) Honest men trust easier than thieves.
O'Grady (1980), 吉村(1995: 295)から再引用
- (32) This wine drinks well.
<https://www.grin.com/document/36907> (閲覧日: 2021.06.19)
- (33) I awoke early in the morning.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22I+awoke.%22>
(閲覧日: 2021.06.15)
- (34) Sweat dropped from his chin.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22dropped%22>
(閲覧日: 2021.06.19)

(31)は知覚者が聞き手に人生の教訓を聞かしてあげたいことをアフォードしていると解釈されることから、聞き手にとって有利(有益、無害)なものであると考えることができる。しかし(27)のようにもし陰口(告げ口・秘密告知・ストレス発散など)のために、発話されたとしても依然として、中間構文が聞き手に与えるアフォーダンスは、有利(有益、無害)なものと言えるかという疑問が起こる。本稿では日本語や英語中間構文は、話し手の発話目的がどうであれ聞

き手に与えられるアフォーダンスは、有利(有益、無害)なものとする。というのは4.6節で述べたように、知覚者(聞き手も含む)にはどんなアフォーダンスを取るのかという選択肢が置かれているからである。無生主語中間構文の(32)に対しても同様の説明が可能である。このことは(35)に見られるように、英語中間構文が宣伝文(広告用文書、器具や装置の取扱説明書など)によく使われることから裏付けられる。以下の(35)の例は吉村(1995: 255)による。

- (35) a. EOS layouts adapt quickly easily to changing office needs. [宣伝]
 b. (Shoe box rack:) Made of sturdy yet lightweight enameled steel, it tucks away neatly into a closet. [宣伝]
 c. It (This folding bed) converts easily. [テレビCM]
 d. Your new oven will clean in minutes. [使用説明]
 e. These shirts wash in cold water only. [注意書き]
 f. Business and pleasure mix well at night. [運勢占い]

これに対し、関連構文の(33)や(34)にはアフォーダンスが与えられないために、基本的に有利(有益、無害)か否かという解釈の余地がない。もちろん(33)の内容は主語にとっては有利(有益)なものかもしれないが、(33)の事実を聞いた知覚者にとっては、むしろ有利(有益)とも不利(無益)とも判断のしようがないと言える。このことは(33)や(34)のような文が宣伝文(広告用文書、器具や装置の取扱説明書など)に使われにくいことからでも裏付けられる。

4.8. 社会的アフォーダンス、インターパーソナル・セルフと 中間構文・関連構文

辻(2002)によれば、社会的アフォーダンスとは対人的な発話や行為から与えられるアフォーダンスのことを言う。これを次の英語中間構文に当てはめてみよう。

- (36) She intimidates easily.
 (37) This rose prunes easily.
<https://www.grin.com/document/36907> (閲覧日:2021.06.19)
 (38) He swam the Strait (s) of Dover.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22%28s%29+Dover%22>
 (閲覧日: 2021.06.19)
 (39) The temperature [It] fell 5° to zero, below freezing.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22T%5BIt%5D%C2%B0to%2C+%22> (閲覧日: 2021.06.19)

まず(36)を知覚した最初の知覚者がいるとしよう。かりにこれを知覚者₁とする。次に知覚者₁は最初の聞き手(聞き手₁)に(36)を伝達する。聞き手₁は知覚者₁から聞いた情報を土台に主語の属性を知覚する。その聞き手₁は主語の属性知覚からあるアフォーダンス(主語「彼女」を怖がらせるのか、あるいはどのように怖がらせるのか、それとも怖がらせないのか)を選択する。すると聞き手₁は知覚者₂となる。知覚者₂の聞き手₁は新たな聞き手、すなわち聞き手₂に(36)を伝え、聞き手₂は(36)から与えられた複数のアフォーダンスのうち1つを選択する。(37)に対しても同様の説明が可能である。このように特定主語の属性情報が複数の聞き手に伝わり得る可能性が高いために、英語中間構文にはインターパーソナル・セルフという概念も同時に適用されると考えることができる。これに対し、関連構文の(38)は人間社会のなかで一時的に話題や知識にはなるかもしれないが、複数の聞き手にある行為を取らせる(「泳がせる」)ような社会的アフォーダンスが成立することは難しいと思われる。しかし、主語の情報は共有される可能性があるために中間構文と同様にインターパーソナル・セルフ概念は当てはまり得ると考えられる。(39)に対しても同様の説明が可能である。

4.9. 探索的行為、遂行的行為と中間構文・関連構文

千(2021)では、日本語中間構文で探索的行為や遂行的行為というものが組み込まれているとした。このことは(40)や(41)に対しても同様のことが言える。というのは(40)と(41)の英語中間構文は主語の属性をあらかじめ探索したことを前提にしなければならない文である同時に、聞き手に何かをすること(アフォーダンス、遂行的行為)を促すからである。

- (40) a. He always draws[pulls] back at the last moment.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%5Bpulls%5D>.
(閲覧日: 2021.06.19)
- b. Her skin burns easily.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22burns%22>
(閲覧日: 2021.06.19)
- (41) The chest will unlock easily if you try to. cf. 影山 (2002: 191)
- (42) He just smiled when he was handed the prize.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/He+just+smiled>
(閲覧日: 2021.06.19)
- (43) My injured finger burned and throbbed with pain.
<https://ejje.weblio.jp/sentence/content/%22throbbed%22>
(閲覧日: 2021.06.19)

これに対し、関連構文(42)や(43)は知覚者の探索的行為のみを記述するものであると解釈される。

以上見てきたように、日本語中間構文と同様に英語中間構文にも生態心理学理論の中心概念である自己知覚の概念を適用できるのに対し、関連構文には適用し得ないか適用しにくいことが分かった。このことから自己知覚概念は、構文分析に有効な分析手段になり得ることがわかった。

5. おわりに

本稿では今まで千(2021)の研究を援用し、英語中間構文にも生態心理学理論で重視する自己知覚概念を適用でき、それが中間構文と形態・統語・意味的に類似した関連構文(非能格自動詞構文と非対格自動詞構文)との違いをも説明できることを述べてきた。このことから英語中間構文は基本構文であり、生態心理学理論が構文現象を解明するのに有力な分析手段となり得ることが分かった。さらに英語中間構文の分析を通して知覚行為において、自己知覚概念の1つである知覚システムの冗長性や等価性が必ず成り立つとは限らないこと、さらにそこから生態心理学的理論の修正が行われるべきであることが明らかになったという点は重視すべきであると考えられる。

参考文献

- 影山太郎編(2002)「第7章 中間構文」『日英対照 動詞の意味と構文』東京:大修館書店。
- 千昊載(2019)「認知意味論的観点から見た日本語の中間構文の研究」
『日語日文学研究』100:133-156。
- 千昊載(2020)「英語中間構文の生態心理学的考察」『言語学論集』29:
77-92。
- 千昊載(2021)「探索行為とアフォーダンスに動機づけられた日本語の中間
構文と関連構文の研究」『日語日文学研究』116:3-35。
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード事典』東京:研究社。
- 本多啓(2013)『アフォーダンスの認知意味論』東京:東京大学出版会。
- 吉村公宏(1995)『認知意味論の方法-経験と動機の言語学』京都:人文書院。
- Nakamura, Masaru(1997)The Middle Construction and Semantic Passivization. In:
Kageyama Taro(ed.)*Verb Semantics and Syntactic Structure*, 115-147. Tokyo:
Kurosio Publishers.
- Nieda, Mitsuko(2005)“A Cognitive Approach to English Middle Constructions.”
『京都教育大学紀要』106:129-143.
- O’Grady, William D(1980)“The Derived Intransitive Constructions in English,”
Lingua 52:57-72.

**Linguistic Phenomenon on Middle Construction of Japanese and English
Synchronized with Self Perception:****Centering exploratory action and affordance**

Cheon, Ho-Jae

【Abstract】 The fact that self-perception (exploratory action and affordance) concept which is important in ecological psychology theory, that is, the concept such as activity of perception, perception system, perception of exercise and intention in organism, affordance and self-perception, redundancy of information and self-perception, circulation of cultural learning and perception activity, affordance and evaluation, social affordance and interpersonal self, exploratory and performatory can be applied on middle construction and it can explain the difference between middle construction and related similar in morphological, syntactic and semantic (unergative construction and unaccusative) is discussed in this study.